



## ✧ 研究会報告 ✧

租界・居留地班 第80回研究会

# 「中国製ポスターと雑誌の関係」

日時：2022年12月15日（木）15:00～17:00

場所：対面+Zoomのハイフレックス開催

対面会場：横浜キャンパス・非文字資料研究センター会議室

田島 奈都子（青海市立美術館 学芸員）

## 1. 研究の端緒

本研究は戦前期に製作された中国製ポスターの中に、同時代の新聞雑誌に掲載された写真を、下敷きにした作品が多い実態を立証するとともに、その意味やそこから派生する事象について考察したものである。

研究の端緒は大きく二つある。一つ目は2016年からの数年間に、報告者は香港文化博物館とマカオの個人コレクター宅において、戦前期の中国製ポスターをのべ1500点ほど、直接閲覧調査する機会を呉詠梅博士と共に得たことである。これまでも同様の作品は展覧会や日本国内での調査、および各種『作品集』を通して、それなりに閲覧してきた。しかし、所蔵されている作品を1枚の状態で、大量に集中的に総覧することによって得られる知見は多く、この機会は非常に有意義であった。

二つ目は神奈川大学における『良友』画報研究会への参加（その成果は『上海モダン』『良友』画報の世界』勉強出版、2018年としてまとめられた）であり、これを機に報告者は同誌や同誌と同時代に編集発行されていた新聞雑誌を閲覧することになった。こうした作業は当初、『良友』自体の特徴を探るためのものとして始められた。しかし、同誌の表紙の中には、ポスター画家としても活躍した謝之光が描いたものがあつたり、梁得允の作品とされる1929年11月発行の『良友』第41期の表紙絵《舊門》が、杭穉英によるポスター《中国華東煙公司》として世に出ていることが判ったりした。このため、当時のグラフ雑誌とポスターの間には、何らかの関係性があるのではないかという仮説に至り、前述した「発見」があつてからは、より積極的に紙誌の閲覧を行うようになった。

## 2. 調査方法とその結果

本研究の関係で閲覧した主要な新聞雑誌は、『申報』『盛京時報』『申報図画週刊』『良友』『上海漫画』『時代』『玲瓏』『文華月刊』『中華』『北洋画報』『電聲』『明星畫報』『青春電影』『中華影業年鑑』『影壇』などである。

昨今の中国においては、戦前期に編集発行された雑誌の影印版での復刻やデジタル公開が活発であり、このた

めこれらは日本国内においても閲覧が容易となっている。中でも1920～40年代の主要な映画雑誌に関しては、それらを網羅した影印版の「老上海電影畫報」シリーズが刊行されており、本研究にとってもこのシリーズは非常に有益であった。なぜなら、映画雑誌はその特性上、人気女優の肖像写真がふんだんに掲載されており、当時のポスター画家はそれらを下敷きとして、ポスター用原画を描くことが多かったからである。その一端を示すのが、1935年9月20日に発行された『青春電影』第2巻第7期に掲載された、女優の胡蝶とその愛犬を撮影した、《胡蝶與她的愛犬白莉》【図1】と、それを下敷きとして耀光によって描かれた《蝴蝶商標超等線襪》【図2】の存在であり、同様の具体的翻案例は本調査によって多数発見された。

なお、そのようなポスターに見られる特徴としては、①主題はいわゆるモダンガール、②製作年代は1920年代後半以降、③製版方法は写真製版術、④多作な作家ほど写真を多用している、⑤写真としての公開からポスター化の間には時差が存在する、⑥主題の服装や髪形はポスター化に当たって改変される場合が多いものの、ポ

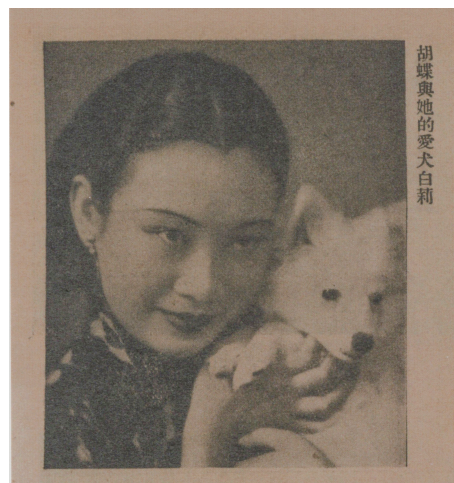


図1 1935年9月20日『青春電影』第2巻第7期《胡蝶與她的愛犬白莉》（復刻版 p.17）



図2 1935年 耀光 《蝴蝶商標超等線襪》  
蕭春源氏蔵

ーズやアクセサリはそのまま踏襲されている、⑦同じ写真にもとづいたと思われる、異なる画家による異なる依頼主のポスターが存在する、といったことが挙げられる。

1920年代後半以降になると、中国においても映画が庶民の娯楽として定着し、その出演者が人気を博した。中でも、流行最先端の衣装を身に着けた美貌の女優は、時代を象徴する存在として憧れられた。一方、この時代は全般的に、雑誌の創刊や拡充が相次いでおり、それらにとっての写真は売り上げを左右する重要な要素となっていた。そして、それを可能としたのが製版印刷術の改良であり、写真は時代を経るにしたがって、より鮮明に印刷物として複製出来るようになり、それが視覚性の強い新聞や雑誌を高速印刷され、世の中に流布することにつながった。

要するに、1920年代後半以降の紙誌に掲載された写真が、ポスター用原画を製作する上で大いに参照されるようになった背景には、いくつもの要因が軌を一にして起こったことが関係しており、何か一つが欠けてもそのようにはならなかったといえる。もっとも、写真の下図としての多用には、商工業の発展に伴うポスター需要が高まる中であって、それを専門に手掛ける画家であっても、常に「創作」で応えることが難しかった面も否めない。ただし、著名な写真家や写真館が撮影した写真を下敷きにして描いても、中国人のポスター画家たちは自らが絵筆で描いた作品には、ほぼ必ずサインや落款を入れており、ここからはそれらに対する「自作」としての強い意識が読み取れる。

### 3. 今後への期待と課題

本研究は大量の実物作品の閲覧と復刻された紙誌の調

査が、同時並行的に行えたことによって成り立っており、今後より多くの作品や資料を閲覧する機会に恵まれば、新たな組み合わせが見つかるものと思われ、報告者もそのようになることを祈念している。

一方、現時点におけるこの研究は、報告者の経験や記憶をよりどころにしているものの、関連しそうな画像の蓄積が進み、それらをコンピューター内で類似検索可能となれば、より多くの組み合わせを短時間で抽出出来るはずであり、その時期の到来は遠い未来ではないだろう。

では、こうして得られた調査研究結果を、その後どのように活用するかであるが、確実に役立つのはポスターの製作年代の絞り込みである。戦前期の中国製ポスターに関しては、画面上にカレンダーが入っていなければ、製作年の特定がほぼ不可能な状態にあり、それが同国のポスター史や、各画家の活動歴を編む際の大きな障害になっている。

一方、紙誌は発行年が明確であり、かつそれらに掲載された写真を下敷きにした作品は、必然的に紙誌よりも製作年が後になることから、既存の情報よりも大幅に絞り込まれることになる。また、そのような結果は客観性が伴うだけに、誰にとっても「真実」となり、所蔵先や論者によって異なる作品情報を、統一するための手段としても適当である。

もっとも、このことは逆説的に、製作年が特定出来るポスターが写り込んだ写真が、どこかから新たに発見された場合、その写真はポスターよりも以降に撮影されたことになり、写真の撮影年代の絞り込みにも有効になる。

現在、戦前期のポスターと写真に関しては、中国においても個別に研究が進められており、両者が手を組んだ事例はほとんどない。しかし、前述した関係性が認められる以上、共同研究を行うことは両分野にとって有益であろうし、写真の像主のほとんどが女優であったことを考慮すると、そこに映画分野の研究者を加えれば、当時の視覚文化全体の様子は、より立体的に見えてくると思われる。

なお、本研究においてはポスターと同時代の中国において編集発行された、紙誌を閲覧対象としたものの、この時代の中国製ポスターの中には、欧米の雑誌に掲載された写真を翻案としたものも存在している。要するに、当時のポスター画家たちは今日のわれわれが思っている以上に、手に入るさまざまなものを活用していたのであり、そのような状況を考慮すると、閲覧すべき対象はかなり幅広くなり、研究はよりグローバルなものになってくるかもしれない。

いずれにしても、新型コロナウイルスの蔓延以降、海外調査は難しくなっていたものの、現在は各国の入出国規制もだいぶ緩和されてきている。こうしたことを踏まえて、今後は現地における閲覧調査を再開させるとともに、得られた知見の外国の研究者との共有化などを図っていきたいと考えている。